りびんぐらいぶず　平成二十一(二00九)年一月第二号

名号を称すること

「称」は御なをとなふるとなり、また称ははかりといふこころなり、はかりといふはもののほどを定むることなり。名号を称すること、十声・一声（とこえ・ひとこえ）きくひと、疑ふこころ一念もなければ、実報土へ生（うま）ると申すこころなり。
（Ref『一念多念証文』註釈版聖典 P694）

一、浄土真宗は名号による救い

浄土真宗は、御本願叶って届けられるお名号による救いであります。お名号が確かに働いていて下さることは「号」が果位の名であることから知ることができます（Ref 正像末和讃 註釈版 P621）。宗祖の六字の字訓釈によりますと、お名号は如来様が御本願の御心から「私の願いに気づいておくれ」と思いを込めて告げ喚び続けて居て下さる阿弥陀如来様直々の御喚び声であります(Ref「六字釈」註釈版 P170)。

二、称名は、如来様が自らの存在を知らしめ給う仕掛けである

ところが、私達衆生は自らは苦悩の存在であるにも関わらず、その救い主である阿弥陀如来のいらっしゃることを全く知りません。そこで、如来様は衆生をして自らの存在に気づかしめ願いを届けるために優れた御手立てを講じていて下さるのです。それが如来様より賜る衆生の行としての「称名」の位置づけであります。なぜなら大行釈に「**大行とはすなはち無碍光如来の名(みな)を称するなり。**」とあることより、称名が如来様の行であることが知られ、その行を「**発願回向というは、如来すでに発願して衆生の行を回施したまふの心なり**(六字釈　註釈版 p170)」として如来様の方で既に仕上げて衆生の行としてお与え下さっているからであります。

これは、お名号を「**称えもの**」（**衆生の行**）として如来様の方から回向していて下さる証拠の御文であります。

ここに、如来様がお名号の働きとして私を呼び覚ますに当って、まず、声に出だすという衆生の行をお与え下さった秘密の鍵があるのでした。このことは人類史上、文字が現れる迄は、まず、お名号は口で誦するという行為が先にあったのだということから容易にうなづけます。

顧みれば、阿弥陀如来は、第十八願文において「**すなわち十念に至るまでせよ**」と促していて下さいました。その「十念」が口称の念仏であると明らかにして下さったのは善導大師と法然聖人でありました。

御本願の深い思し召しにより如来様が促していて下さるのですから、私は南無阿弥陀仏と称えるのです。称名念仏は如来様の御本願に謳われ如来様から賜った「衆生の行」だから仰せの通りに私は「南無阿弥陀仏」と称えさせて戴くのです。

三、称えれば聞こえて下さるものは如来様の御喚（よ）び声

称えれば聞こえて下さる「南無阿弥陀仏」を私は自分の声が聞こえた丈だと思いがちです。けれどもそう思うのは今生わずか何十年の経験則による錯覚にすぎません。実は、聞こえて下さる南無阿弥陀仏は如来様直々のお喚び声に他なりません。お名号が聞こえて下さるということは阿弥陀如来がいらっしゃって現に働いていて下さる何よりもの証拠だからです(Ref「仏願の本末」註釈版 P251)。

四、本願招喚の勅命

聞こえて下さるお名号は如来様がこの私に向って「この阿弥陀をタノミニセヨ、この阿弥陀にマカセヨ」と大声で喚びづめに喚んで居て下さる御喚び声であります（Ref 行巻「六字釈」　註釈版 p170 他）。

如来様からご覧になると私という存在は危なっかしくて仕方があり

ません。そこで、如来先手の御手立てとして既に発願し給いて万徳込めたお名号を私に回向していて下さるのは、危急存亡の私をすぐにでも救い取りたいとの思し召しによります(Ref「立撮即行」七祖 P424)。

だからこそお名号はお喚び声となって無明の闇にまどろんでいる私を呼び覚まそうとして休みなく働きかけていて下さるのでした。

如来様は「苦悩の私を放ってはおけない」とご覧になり、「私はここにいるよ」と大声で喚び覚まそうとなさり、「あなたを決して一人にはしない」といって抱き取り抱き上げて下さることでありました。

こうして名号を称すれば聞こえて下さる南無阿弥陀仏の御名、如来様の仰せに聞き入ることを「**聞名**（もんみょう）」と申します。

五、信心の構造

そのようにお聞かせに与っても俄かに頷けないのは如来様の仰せを疑っている姿に他ありません。私達は譬えてみれば「蓋付き湯呑」ですので如来様の仰せが遥かな昔から届いて下さっているのに、仰せが飛び込んで下さる胸の入り口にしっかりと疑いの蓋をしている様なものであります（Ref「疑蓋間雑」註釈版 P234）。これではいかに如来様のお慈悲の法水が注がれていようとも、全部撥ねつけてしまって入って来ては下さいません。ですから、如来様の仰せと私との間に疑いの蓋を雑（まじえ）ないことが大切だと言われるのであります。

そのようにお聞かせに与りその時が来て思わず知らず疑いの蓋を取り去るというとその瞬間、如来様の法水が一気に私の中に飛び込んで下さいます。このプロセスを浄土真宗では信心を頂戴すると申すのであります。本願力回向のお名号は休みなく届いて下さっているので、私の疑いの蓋がなくなるや否や瞬間的にわが胸にお宿り下さることになるのであります。信心は、阿弥陀仏の本願招喚の勅命（衆生を招き喚ぶ声）に従う心だと言われる（Ref：註釈版 P1565 補註 11）所以であります。

六、称名は私がお育てに与る秤（はかり）であること

如来様のお喚び声に呼び覚まされて信心を頂戴したからといって娑婆の三毒の機類である私の本性が変わる訳のものではありません。

実はお喚び声が届いて下さったその日から私はいよいよ他力の念仏者として如来様のお育てに与るのであります。如来様はその御手立てとして南無阿弥陀仏と称える大行を位置づけておいでありました。信心を頂戴したとはいうが、果たしてこの私は阿弥陀如来様の願い通りに相応しくピッタリと育っているであろうかと愚かな私が如来様のお育てに与る基準となるのが実は名号を称することだというのです。称える度に如来様の御喚び声に呼び覚まされ、その都度「何というお恥ずかしい愚かな私でありましょうや」とわが身を顧みる秤となって下さるのが称名だったというわけであります（Ref 瓜生津隆真先生平成二一年一月二十一日愛糠会例会）。

なるほど信心を頂戴するのは一瞬でも、そのお育てに与るには長い歳月を必要とすることでありました（Ref 梯　實圓和上平成二十年十一月二十八日京都専精舎報恩講ご法話）。

ご開山聖人が「**称ははかりといふこころなり、はかりといふはものほどを定むることなり。**」と示されたのは実はその御心でなかったかと思われることであります。合掌。

◆正覚寺仏教壮年会例会　毎月第一日曜午後八時より
◆正覚寺仏教婦人会例会　毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)
〒五二０－０五０一滋賀県大津市北小松四五二番地 ☎０七七－五九六－０一六六
ＦＡＸ０七七－五九六－０一六六 ﾒｰﾙ mhkatata@mx.scn.tv 使務 堅田玄宥